

## 編集後記

最近、隣の部屋の地質学者が惑星地質学に関係しているとして、次のような話を語ってくれた。「45.5億年の地球史において太古代(25-40億年前)のプレートテクトニクスの起動は海洋プレートの沈み込み開始により地球表層の原始地殻を花崗岩質の大陸地殻と玄武岩質の海洋地殻に分別させた。とりわけ大陸塊は太古代~初期原生成に形成した地殻を現在まで保持し、2億年より若い海洋地殻とは化学組成と形成年代に関して極めて対照的な存在である。この地殻の二極性は地球と他の固体天体との決定的相違点であり、固体地球内部の進化とダイナミクス及び、表層環境に複雑性をもたらす要因の1つである。特に形成年代の古い安定地塊は、冷たく(極めて地殻熱流量が小さく)厚い大陸リソスフェアの存在で特徴付けられ、そのマントル対流への熱的影響は原生成以降の超大陸の離合集散のサイクルと安定地塊を核とした造山帯・陸塊発達に深く関与している。」

私は、常にイトカワのような小惑星のことで頭がい

っぱいなので、正直、先の話で惑星地質学に関連した興味をあまり感じなかった。しかし、『大陸の離合集散』というフレーズは脳裏に突き刺さった。この宇宙も太陽系も固体地球も進化している。その中で、固体地球の進化に『大陸の離合集散』が常に伴われるという話は、昔、どこかで習った気もするが、普段考えたことも無かった。離合集散が進化の起爆剤にも思え、とてつもない大きなエネルギーを感じた。一晩経って、地質学者に、離合集散のサイクルのなかで、一番、興味深いのはどこだと問うた。彼は圧倒的に超大陸ができるプロセスだと言った。また、超大陸ができてこそ、進化の過程で分裂・離散も起き、さらに、それがまた集合して、もっと強烈な超大陸ができると熱く語った。

人間社会にも同じようなことが言えるのではないかと、そこまで語った彼は直後に肺炎で入院した。皆様ランニングの季節はすぎましたが体調管理にお気をつけ下さい。

国広 卓也(編集幹事)